

## I - 2. 命題提示でよい講義

放送大学客員教授 澤 田 昭 夫

よい講義とは何か。それはよい論文と同じく、分かりやすい講義である。もちろん、内容の正確さ、真実性が「よい」ことの大前提ではあるが、いかに正しく、深慮、豊富な内容も、複雑、晦渋に提示されては、コミュニケーションが成立しない。宝の持ち腐れになる。しからば、分かりやすいとは何か。それは透明、つまり構造的、なによりもQA構造的ということであり、「QA構造的」は「命題提示的」とも言い換えられよう。

「よい論文とは何か」。これがQ（問）で、「それはQA構造的論文である」というのがA（答）である。だめな論文とは、QがないからAもないもの、「何かについて」、たとえば「論文について」さまざまなことを「そこはかとなく」述べたてる「徒然草」である。結局何をいっているのか分からない。通じない。<sup>(注)</sup> QA的論文は命題提示的論文といってもよい。命題とはQに対するAであり、主語Sと述語Pの結合に他ならない。「よい論文とは」(S)、「QA構造をもった論文である」(P)というのが命題である。

講義についても同じことがいえる。講義とは「口と音で書く論文」に他ならない。違うのは、講義の場合にはQA構造、命題提示が、論文つまり「手と字で話す講義」の場合よりもはるかに大切だということである。「字による語り」の場合は不明であれば、読者は頁をめくって、二度、三度繰り返して読むこともできる。「音による語り」の場合は、それができない。字は残っているが、声は流れてしまったら帰ってこない。一回勝負である。したがって、講義の場合は、QA構造を明らかにする、命題を提示する、そして適度に繰り返して提示することが一層必要になる。

J.M.ボヘンスキー (Bochenski) というポーランド出身の哲学者で、論理学とマルクス主義の世界的権威が、南独のババリア放送局から「マルクス・レーニン主義」について連続講演をしたことがある。彼の講義がすばらしかったのは、内容の深さ、広さもさることながら、透明、明確、(ドイツ語でいう)「水晶のごとく明澄で」(Kristallklar)、「子どもでも分かる」といいたいほど分かりやすかったからである。たとえば党についての一講話は、その全体が「マルクス・レーニン主義において党とは何か、いかなる目的、機能、組織、属性をもっているか」という問にたいする答になっており、現実には次のような一連の命題を提示していた。「共産主義はイデオロギーと組織から成る」「党は行動するイデオロギーである」「党は最終的、不可謬の権威である」「党は少数のエリートである」「党はプロレタリアのために考えてくれるエリートである」「民主主義とは党の支配である」「党は職業的革命家から成る」「党には発信組織とフロント組織が属する」などなど。

書く、論文を書く、本を書く、話す、講演会で話す、ラジオ、テレビで話す、それらすべてはコミュニケーションのさまざまな形であるはずなのだが、QA構造的ないし命題提示的でない、語りはあってもコミュニケーションにならない。QA構造的ないし命題提示的で分かりやすく語られて初めて語りがコミュニケーションになる。コミュニケーションとはそもそも

「コンムニカーレ」(communicare)つまり、自分の考えを読み手、聞き手に「共有させる」ことであるから、相手に受信される形で発信されなければ、コミュニケーションにならない。そうしなければ、語りは「ピントはずれの写真」「ぶれた映像」「雑音放送」のように宙に浮いてしまって、使いものにならぬ一方的発信に終わる。「分かりやすい、Q A構造的、命題提示的な語りを」と繰り返し、繰り返し申しあげるゆえんである。

---

(注)

よい論文とはQ A構造的であるという、レトリック3000年の伝統に根ざした考えを思い出させてくれた、ひとつのきっかけは、イギリスで出会ったサレー大学の副学長との会話であった。彼はこう言った。「日本の専門の同僚から論文の抜き刷りが送られてくるが、大部分はなにを言っているのか分からない。どうしてなのだろう」。「英語が通じないのですか」とたずねると「いや、英語は通じる。ただ、著者がどういう問題に対してどういう解決を提供したのか、それがさっぱり分からない」という答が返ってきた(詳しくは拙著『論文のレトリック』(講談社学術文庫)の第一章「よい論文とは」を参照)。